

東京大学史料編纂所蔵『一乘院諸記』翻刻

高橋秀城

*キーワード

坊津一乘院・島津家本・一乘院経蔵記・仁和寺聖教・中将姫舍利伝記

ここに翻刻紹介する東京大学史料編纂所蔵『一乘院諸記』（写本・一冊）は、島津家編纂員であった坂田長愛氏の所蔵本（写本一冊）を、大正十二年（一九二二）に大山武次郎氏が謄写したものであり、島津家本の一冊である。

書誌的事項は以下の通り。

東京大学史料編纂所蔵『一乘院諸記』（島津家本さⅡ12+36）。柿色表紙左肩題箋に「一乘院諸記 全」と直接墨書。寸法は、縦二七・二糎、横一九・〇糎で、袋綴（四つ目）の写本一冊。全二十四丁（表紙を含まない）。本文料紙は楮紙打紙。「公爵島津家編集所」と柱書を持つ野紙に每半葉十行、毎行十九字内外。本文は漢字仮名交じり文。墨訓点（返点・送仮名）、朱訓点（合点・傍線・注記）あり。背に「一乘院諸記 全」と直接墨書。扉に「一乘院宝物記／一乘院由緒／一乘院下乘碑／一乘院鐘銘」と目次を記す（改行は／で示した）。一丁表に「如意珠山宝物開帳述記」、十九丁表に「一乘院由緒」、二十丁表に「一乘院下乗之碑写」、二十丁裏に「一乘院鐘銘写」と内題を記す。扉中央と二丁表右上に朱方印陽刻「公爵島津家編

輯所図書之印」（三・四糎×三・四糎）印、二十二丁裏左下に朱長方印陽刻「島津家編輯所」（一・八糎×一・四糎）印あり。

『一乘院諸記』には、冒頭「一乘院宝物記」（内題は「如意珠山宝物開帳述記」）から、坊津一乘院所蔵の寺宝の数々が列挙されており（六十四項目）、それぞれにその伝来の経緯などが記されている。奥書はないが、本文中に宝暦十年（一七六〇）の年紀が見えることから、江戸時代中期以降の成立と思われる。

一乘院の宝物については、『一乘院諸記』の他にも、東京大学史料編纂所蔵『一乘院経蔵記』（寛永十一年〔一六三四〕写）や、一乘院第二十六世快宝（延享年代〔一七四四〜四八年〕）の『一乘院宝物記』、『三国名勝図会』（天保十四年〔一八四三〕刊）に見ることができ、それらを相互に検討することにより、一乘院の寺宝や伝来の経緯などがより具体的に浮き彫りになるものと思われる。詳細な検討は別稿に譲り、本稿では全文を翻刻紹介する。

【凡例】

一、底本は東京大学史料編纂所蔵『一乗院諸記』（島津家本さⅡ-12+36）である。

一、行移りは底本のままとした。

一、漢字は原則として通行の字体に改めた。

一、改丁は「 」をもって示し、（1オ）のように丁数ならびに表裏を記した。

一、仮名合字は「フ」↓「シテ」、「フ」↓「コト」、「カ」↓「ヨリ」のように関いた。和歌に付されている合点は「へ」で示した。

一、朱書による書き込みは（ ）に括って示した。

一、底本には、虫損箇所「 」の朱印が押されており、該当箇所の文字は□で示した。なお、人名や年号には朱線が施されているが、内容には直接関わらないことから翻刻では割愛した。

【本文】

一 乗院諸記 全

一 乗院宝物記

一 乗院由緒

一 乗院下乗碑

一 乗院鐘銘

如意珠山宝物開帳述記

一 仏牙御舍利 以鳳凰鳥羽ノ茎為塔トナレム之

右由来ハ天竺善□□蔵養老二年戊午ニ来朝シ其

時此仏牙之舍利ヲ持来ル神亀元年甲子屢ハ在大和

国ニ応聖武天皇ノ懇請奉ニ進此仏牙ノ舍利ヲ從ルシ数代

安ニ置宮中ニ皇家鎮護ノ御本尊トシ然ニ寛平太上天皇出

家シテ為ニ仁和寺開祖ト其節此仏牙納ニ仁和寺ノ塔中ニ從

ルシ是仏牙在ニ仁和寺宮ニ歴ニ五百余年ノ序ニ応永二十

三年丙申十一月十三日当寺□師法印第四世 （1オ）

頼俊上人随ニ仁和寺ノ智恵門院有海僧正ニ伝法之

砌リ被ニ附屬ニ此仏牙ノ御舍利ニ於頼俊上人從レ爾安ニ置

当寺ニ伝来ル也○又或一説ニ此御舍利ハ坊津浦人上

古ニ悪風ニ被レ放不レ思漂着シ天竺ニ持来テ奉ニ納ニ一乗院、

経蔵ニ申一説有レ是レハ誤也ト云

一 水精自然石ノ御舍利 転ニ在シテ上ニ不ニ下ヲ居ニ

右此由来ハ当山根本開山百濟国ノ日羅聖者推古

二年甲寅ニ此感得ニ金峯山ニ御舍利也而シテ其數百年ノ

後隠没ス明応七年戊午春正月元朝感得ニ先師第

六世頼政上人此闕伽井ノ辺ニ也寛永十一年甲戌 （1ウ）

秋邦君家人公請レ之ヲ為ニ護持ノ御本尊ト也爾ニ在ニ武州

江戸御館舎ニ為ニ類火ノ焼失ス明暦二年丙申正月元

日当寺門前ノ鮫嶋大蔵カ母汲ノ若カ水ヲ硯川ニ時ニ郡鳥此
落ニ入ル水桶之内ニ即此ヲ奉ス第十六世山主^状意上人ニ
于此歴ニテ二十余年ヲ再還ニリ来リテ於当寺喜悅シテ設ニ大法会
奉レ納ニシテ経蔵一者也

一 誕生仏金像 天竺所造

右由来ハ享祿年中ニ当津中村氏カ之商舶為ニ逆風ノ不レレニ
量到ニテ□土ノ辺地ニ着岸ス時ニ四月八日也水主楬取等

詣ニヌ一ノ仏閣ニ其堂中ニ安置ニ誕生仏ノ像數体ノ貴賤ノ男女

供養恭敬ス焉当津中村氏知レテ有ニルニ深信ニ与ニテ其數体ノ内

一軀ヲ云々終ニ凌ニキ風波ノ難ヲ天文ノ初年ニ帰着ス当津ニ中村

氏ガ所ノ持来ニ物ニ誕生仏ニハ龍ノ子三ニハ天竺ノ松葉五茎

四ニハ貝玉五粒五ニハ天竺ノ數珠一連六ニハ綴錦三尺ト云々

右ノ内奉ニ納ス誕生仏ヲ当寺ニ

一 地藏造菩薩埴像 鳥仏師作

右鳥仏師ト申ハ唐土ノ仙人也養老二年戊午来朝シ在ニリシ

大和国春日ノ里ニ故世ニ云ニ春日仏工ト天平年中ニ帰ニ唐

土ニ飛行自在ノ仙人ヲ故飛ヒ去ル以ニ所為ニ世ニ呼ニト鳥

仏師ト也大和国初瀬寺ノ觀音右作ノ隨一也

一 地藏菩薩ノ埴像 弘法大師御作

右弘法大師御幼童ノ時所ノ造ヲ物也大師ハ宝龜五年

甲寅六月十五日誕生於讚岐国多度ノ郡屏風ノ浦ニ

也

六 一 毘沙門天金像 弘法大師御作

右天文ノ初年上野ノ国司ノ子日□上人西国行脚ノ時
為ニシテ道路拜信ノ本尊ト持来ヲ納ニ于当寺ニ也

七 一 五輪埴像 弘法大師作

八 一 梵字埴像 右同

九 一 觀音ノ埴像 右同

十 一 弁財天埴像 右同

右御室一品入道覺□大□賜ニテ第十三世先師覺

因法印ニ者也

十一 一 護身毘沙門天王像 運慶作

右洛陽東寺自ニリ宝菩提院信惠大僧正ニ賜ニ先師第

□七典瑜上人ニ者也

十二 一 五智金剛鈴

右弘法大師入唐御請来也弘仁十一年庚子ノ春

真濟僧正隨ニ弘法大師ニ兩部大法授受ノ時得此等ノ

附屬ヲ在ニ高雄山神護国祚寺ニ御修法ノ外不レ出レ之久

伝ニ於彼ニ来ル処ニ慶長十一年丙午ノ春先師第一世賴

興法印於ニテ彼道場ニ隨ニテ法身院晋海僧正ニ云法時得ニ

此等ノ宝物ノ附屬ヲ来者也。因云奥院大師堂弘法大

師御自作木像是又晋海僧正被レ附ニ屬於賴興法

印ニ依レ之安置於当院ニ者也愛ニ三州大守義久公為ニテ

御本願ト蒙ニリ白銀十枚ノ恩惠ヲ建ニ立シ大師堂於奥之院ニ

「(2ウ)

「(3ウ)

奉^レ安^ニ置^シ之^ノ者也于時慶長十二年丁未三月二十

一日

十三 一 水精ノ念珠一連

右此由來ハ弘法大師辭^ニシテ大唐^ヲ欲^フ帰朝^{セシ}ト須宗皇帝
自取^ニ此水精ノ數珠^ニ御手自与^ニヘテ大師^一也

十四 一 五股金剛宝杵

弘仁七年丙申十月嗟峨天王不^ナ予^{ナリ}時弘法大師
在^ニス高雄山神護国祚寺^ニ勅^ニシ其事^ヲ於彼^ニ來^テ告^ニス大師^一ニ時^ニ

入^テ宮中^ニ以^テ水精ノ念珠此五股杵^ヲ奉^レルニ加^テ持^シ玉体^ヲ惹^ガ
立^ロニ除愈^ス此又先師賴興法印慶長十一年丙午ノ春
与^トニ金剛鈴^ト得^ト晋海僧正ノ附屬^ヲ來^テ現^在於當寺^也

十五 一 午王

十六 一 金山ノ奇石

十七 一 土佐国貝石

十八 一 羅漢袈裟 一 襲 唐織

右由來ハ永正年中唐土金山寺有^ニ火災^ニ第六世先
師賴政上人瀝^ニテ水^ヲ於当院庭^ニ移^ニス時剋^ニ從弟等問^ニ其
所以^ヲ答^フ曰消^ニス唐ノ金山寺ノ火災^ニ云々翌夏右ノ袈裟並

十六羅漢ノ絵^ニ一幅花瓶香呂燭台^ニ三具足^ヲ爲^シテ其礼
謝^ト屬^ニシテ商舶^ニ送^リ來^{ルト}三具足^ハ先年焼失^{セリ}

十九 一 蜀江錦ノ五條袈裟

廿 一 吉蜀江ノ錦地

右吉蜀江ノ錦ハ殷錦乎。右二行由來不^ニ分明^ニ

廿一 一 関白天神像

一 聖德太子御自作ノ木像

右当山先師覺慧上人在^ニルノ下総国西光寺^ニ日得^レ之
來^テ寄^ニ納^當寺^一

廿二 一 毘沙門天王ノ木像

右日新公十一歳ノ御時於^ニ伊佐海蔵院^ニ所^レノ造^リテ物也
貴久公御寄進^ト申伝也

廿三 一 紙一部ノ法華經 鳥子紙一枚書玉ヲ故^ニ曰^ニ紙一部^ト
右当麻ノ中将姫法尼公之御筆宝龜五年甲寅秋
於^ニ当麻寺ノ閑室^ニ一字一札書^キテ云

廿四 一 弘法大師ノ御筆ノ心經

廿五 一 秘密三昧教王經 一卷 光明皇后ノ御筆

廿六 一 紺紙金泥般若心經 一卷 三州大守忠昌公御筆

廿七 一 八名素怛覽 一卷 日新公御筆御寄進

廿八 一 手鏡 一 折

廿九 一 中将姫ノ舍利ノ伝記 一卷
此中将姫ハ不知^レ何^レノ公卿ノ御女^ト云^ト可^レ不^レ有^レ当麻ノ中将姫
如尼公^ニハ其故伊呂波ノ仮名延曆十五年ヨリ至^ニルマテ同^ニ

十二年^ニ弘法大師為^レ求^ニカ大日經^ヲ依^テ涅槃經^ノ四口文^ニ
製作^シテ此伊呂波^ヲ也法如尼公ハ天平十九年御誕生

宝龜六年^ニ薨御也其數十年ノ後^ニ此伊呂波御製作
一 (6才)

也仍可^レ不^レ有^二当麻ノ中将^一 二六

如来乃齒の舍利之流記

ちやうめうは長^サ一尺八分。横さま七分根ハ
二またなり五色ニして数粒の舍利なりあ
には白玉のごとしあにいわ粟粒のごとし
遍体にあり

右舍利ハ南天の□うけん国のちやうめうそ
ん皇の持たる処なり大唐の貞元年中^二いん
じやう三蔵ちやうを取□け□つをすぎて法
を求む□□をしのぎてはるかニ西天ニ行^リ
しバく印土ニ遊ぶ幸ひニかのぢやうめう
そん皇ニ逢ひ奉て此舍利をまのあたりあて
三蔵漢土ニ請来してだいそう皇帝ニごんず
そう朝の諸王代々相請て三十六代を経て此
方だうすい和尚ニ伝付ス爰ニ嗟峨ノ天皇ノ
御宇弘仁元年六月十三日きしん和尚入唐し
て和尚。ゑんちやうニ伝ゑんちやうゑんにん
ニ伝^ル 聖徳太子御所持ゑんにん。あんなあしや
りニ伝。あんなゑんちん少僧都ニ伝^ル 聖徳太子御所持
ゑんちん。いうゑん律師ニ伝其後代々相受て
十八代をへて此□近比めうしん王の御子ま
します□□寺の和尚より上人法しんわうに□

「(6ウ)

□す此人ハ天台座主なり観智六年六月晦日
上人のふうしんわうより。こし□□の法皇ニ
渡し奉ル其故ハ多クの仏像を造立し造らる
所のうへ三百粒の御舍利供養之時此舍利浮
ミ流て自在の神變有三百粒のうちなり百粒
ハ宇治の御堂蓮花王院ニ奉納如此して建仁
三年四月八日宇治の御堂より紀之国小川寺
の円光房此舍利をたまゑらん其故ハ宇治の
大僧正の弟子二條大納言の御子息いやまさ
とのと申ス幼キ人のぎ也。へいをおこし奉ら
れける処のかの御布施そ此舍利をたまゑら
ん□□の御ふせをのそいて所望ニよるなり
御舍利百五十四粒

「(7ウ)

正安二年十二月六日

一 忠久公御下向供奉之記 一 軸

右貴久公御幼稚之時於^二当寺^一ニ御習学ノ剋書^レ マコト之云

「(8才)

一 米舍利 一粒 聖徳太子御所持^ト云云舎

利塔上^ノ重/小舍利也

一 波止土澁舍利一粒 伝教大師御所持^ト云云舎

利塔下^ノ重大舍利也

右二種ノ舍利ハ往昔御室仁和寺ノ別院方便智院牛

玉秘伝ノ家業職左大弁扶義伝来ノ御宝物也人皇
五十九代宇多天皇敦実親王左大臣雅信左大

弁扶義十八代ノ孫樋四田判官石見ノ免源重清三

十九代北尾山迹孝昌曆代相統之宝物也。宝曆

十年為僧正任官上京ノ砌依不測之縁求得之依

之奉納經庫永為宝物者也

冊四

一 貴久公御硯 同箱

冊五

一 貴久公御硯 同箱

冊六

一 貴久公御机 唐木

冊七

一 貴久公御連歌御文台

右四行当寺当寺御登山御習学

一 弘法大師和尚位宣旨官符 一軸

御入定ノ後歴三三十余年ノ貞觀六年甲申ニ清和天皇

頻リニ追慕シ大師ノ徳ヲ恋念ノ余リ寵章贈ニ法印大和尚位ヲ於

大師ノ定廟ニ其勅宣曰

伝灯大法師位空海

右贈ニ可ス法印大和尚位ニ勅ス智慧ノ峯高シテ菩提ノ月朗ナリ

持ニシテ三密之法印ヲ為ニ四輩ノ儀刑一人ハ亡ケレトモ道盛ニ世ハ旧ケレトモ名ハ新クニ

惟ニ景慕ノ甚深ニ念ニ追崇ニ而何止シ肆贈ニテ寵章ヲ賞ル齒ニ

可レ依ニ前件ニ主者施行セヨ

貞觀六年三月二十七日

中務卿口品兼行上野ノ大守臣時康親王從四位

上行中務大輔臣転世從五位下守中務少輔臣
橋ノ主雄 奉勅リテ如レ右ノ牒到クハ奉行セヨ

貞觀六年三月二十八日

品行治部卿 賀陽親王從五位守治部大輔

包 參議正四位下行左大弁口勘ケ由長官年

名吉贈ニ可シテ法印大和尚位 空海ニ奉テ勅リテ如レ右符到

奉行セヨ 大録 氏立

治部少輔從五位下忠宗 少録 福守

貞觀六年三月二十九日下ス 少録 宗氏

件ノ官符口伝ニ来ノ於当寺ニ由來者明応年中ニ第六世

先師頼政法印任ニ行法ニ時老僧手ニシテ一軸ヲ來テ授ニ此ヲ頼

政ニ曰ク此ニ是納ニ置テ于当寺ニ者也永勿ニ亡失ニ言ヒ畢テ不知ニ

其去処ニ而開レテ卷ヲ忝宣旨也如レノ是ノ官符可レ在ニ於東寺

高雄山高野山等大師御遺跡ノ地ニ今來ニ于此ニ事不

思議ノ中ノ不思議也誠ニ是朝野逸物口家ノ宝物也

後奈良帝当院勅願繪旨 一軸

当院事為ニ勅願之淨場宜レ奉レ祈ニ皇家之再興ニ由天

氣ノ所也仍テ執達如件 天文十五年三月四日 左中弁国光判

一 乘院法印御房

右勅願之御繪旨ハ当山第八代ノ頼忠上人ニ下給也

去年者始而參会誠以難レ忘存候口口條々御懇

一 (9ウ)

一 (9オ)

一 (10オ)

切共不知レ所射候抑当寺被レ補勅願所之由則論
旨召下候佰国之面目不可過之候猶期後便候
也恐々
資將
二月二十九日
一乘院

去年者興□御□□□之処色く□□□段御
祝著不過之候沙内く御約束候一乘院被レ補勅
願所珍重候則論旨被下進候其後何事共候哉
御床敷由候寿藏主意便候間一筆令申候必從
レ是可被申候恐々謹言
二月二十九日 将久判

橋隠軒御房
私曰橋隠軒ハ 貴久公御遺ノ上京使也俱ニ頼忠上
京也
一 院家兼帯之御下文
仁和寺総法務□□二品親王庁下薩州坊津如
意珠山龍嚴寺 □以山□一乘院永代令兼
帯本寺ノ院家上事右法印釈義解状ニ謹檢ニ□□一当
山者密教弘通之阿闍若安鎮国家之祈願所也
代々祖師仰ニキ 太王ノ高□承ニク 沢ノ御流ニウ 矣望ニ請ニテ 殊蒙ニリ
恩恤ニ成ニシ 賜嚴重ノ御下文ニウ 永々兼ニ住本寺ノ院跡ニ 孜々トシテ
受ニ学ニ正嫡之聖教ニ云々者依レ請賜ニ摩尼珠院ニ畢ス来

際猶以抽ニテ、勇猛懸丹之精誠ヲ念ニシ太守ノ武運長久ニ修
除災与樂ノ秘法ヲ祈ニレ国郡豊饒安全仍所レ□ル如レ件□
徒ノ僧等宜下ク承知シ勿中ル遺失上スルコト故□
寛文五年九月二日
別当前大僧正判 公文采女、正藤原判
大僧都判 從儀師判
權大僧都判 從儀師判
權大僧都判 院司威儀師判
權少僧都判
法眼判

一 弘法大師自画像
右御加□御形質也加持シ嗟峨天皇ノ玉体ヲ御惱
立ニ除愈シテ故ニ御叡感ノ余リ□勅ニシテ大師ニ□□所レノ加レ持ス於□
□容儀ニ可ニシト 図画ニ云々爰ニ大師於ニ御前ニ自画レク之ヲ忝ニ天
皇御自染ニラレ□筆ニ此誦シテ □□和歌ヲ
法性の無漏としいへと我かすめは有為の波
風□□せぬ日そなき
件ノ御製大師於ニ土州室戸ノ崎ニ前キ所レ詠シテ御歌也
右此御影□此第十一世先師頼興上人於高雄
山ニ晋海僧正附屬ノ其一也
一 当麻曼茶羅 又□□曼茶羅 中將姫真筆
中將姫、仁王四十五代聖武天皇天平十九年丁

一 (10ウ)
一 (11才)
一 (12才)

亥ニ誕生右大臣豊成卿ノ御女也生テ聡敏ニシテ且貴幼リ仰テ

御仏神善信シ終ニ成尼公名ニツク法如ト常願ニ西方ニテ亦願極樂ノ

現前ニ一時尼天女二人来リ令テ姫ヲ拜セテ於当麻山ニ極樂ノ

現相即模写ス之ヲ亦彼尼取蓮ス糸ヲ天女繰レ之ヲ漬ニ井ノ水ニ

五色鮮ナリ以レ之ヲ天女機織リス一夜ニ九品ノ相一丈五

尺ニ織頭ス是ヲ授レ姫ニ于今在ニテ大和国当麻寺ニ為ニ宝物也

其所ニ模写スル曼荼羅是也伝ニ当寺ニ来リコト不審也 (13才)

四十二

一 聖徳太子御自画像 曰ニ水鏡ノ御影ニ十三歳ノ御容儀也

仁王三十二代用明天皇ノ太子觀世音菩薩ノ示現

也敏達十四年乙巳ノ春御年十三歳俱ニ諸臣童ト遊テ

亀井ノ池ニ見ニ水影ニ所ニ自画ニ像也伝ニ来スル於当院ニ事不レ詳ナラ

焉

四十四

一 七仏ノ種子毛髮曼荼羅

此本尊ハ弘法大師以ニテ御両親ノ髮ニ縫ニ種子同父母ノ影

像ニ□□□□寺ノ号ニシテ恩岳山報恩寺ニ安置於本尊ニ也然ニ

永正二年癸卯月当院先師頼政上人於ニ讚岐国

恩岳山ノ草堂ニ勤口求聞持ニ已ニ成就シ畢テ帰郷之日從ニ

一 弘法大師定中御頭髮ニ尊種子縫曼荼羅

弘法大師御入定ハ者仁王五十四代仁明天皇承

和二年乙卯三月廿一日寅ノ一点也尔ノ後經ニ九十

七年ノ星霜ニ而仁王六十代醍醐天皇延喜二十

一年辛巳十月二十一日夜有ニ靈夢ニ見ニ大師ニ帝愛ニ有ニテ歡

(13ウ)

□ニ造ニ檜皮色ノ衣ニ同月廿五日贈ニ大師入定ノ岩室ニ勅

使正三位中納言扶閑廟使般若寺觀賢僧正奉ル

レ之二人入ニ高野山ニ奉ニシテ宣旨ニ入ニテ定□ニ乃シ除ニテ爪髮ヲ奉□

御衣ニ觀賢自以ニ大師ノ御髮毛ヲ縫ニ此弥陀三尊ノ種子ニ (14才)

奉ニ進ニ延曆帝ニ々々大悦ヒ而安ニ宮中ニ恭敬尊重ニ歴ニ数代ニ

仁王五十九代宇多天皇御出家ノ時護持シテ 安置シテ仁

和寺ニ也愛ニ仁和寺總法務寛性親王延文五年庚

子十一月十三日於ニテ仁和寺ノ菩提院道場ニ是ヲ賜ニテ當

寺中ニ興開山成円法印ニ也從レルニ在ニテ当院ニ第一ノ宝物

也因ニ日本堂本尊虚空蔵モ与レ彼同賜ニテ成円ニ為當寺ノ

本尊ニ也

一 十一仏画像 (14ウ)

螺髮ハ真如親王ノ頭髮也弘法大師所ニ画縫ノ物也真

如親王者仁王五十一代平城帝第二ノ宮高岳親

王一時攀ニテ登リ高雄山ニ深ク登ニ菩提心ニ弘仁元年庚寅

冬十日脱ニ徒太子ノ位ニ到ニ高雄山寺ニ隨ニ大師ノ除受

戒ニテ法諱ヲ号ニシ真如親王空理ト以ニ其毛髮ニ大師御自縫ニ

此十一仏螺髮ニ同画ニ其仏像ニ而在ニテ高雄山ニ尊重ス焉

愛ニ慶長十一年丙午春先師頼興僧都於ニ高雄山ニ

隨ニ法身院晋海僧正ニ伝法ノ時得ニ此等ノ附屬ニ来リテ安置

於当院ニ伝来也

四十六

一 網敷口神自画像 又ハ曰ニ形見御影ト

又ハ曰ニ形見御影ト

四十七

一 網敷口神自画像 又ハ曰ニ形見御影ト

一 西海金剛峯ノ勅額 後奈良上皇御筆

右由来者当院者天仁帝ノ勅願所也殊更有貞観

帝追崇シテ於弘法大師之宣旨上由先年達ニ天聰ニ如是

以ニ所由ヲ賜下勅額染天筆ニ也高野山ヲ金剛峯寺ト准シテ

彼高野山ニ名ニテ当山ヲ於西海金剛峯寺ト者也如是之

例希代規模也

一 後奈良帝天筆ノ御短冊 御宸筆ナリ

天文十四年乙巳秋被レ叙任ニ第八世先師頼忠ヲ正

三位法印大僧都ニ又以ニ左中将資將朝臣ヲ短冊ヲ被

下賜也

一 深山には鹿そなくなるすそ野なるも□

□らの荻の花や咲らむ

一 うつろはん色を見よとてきくのはの露

もこゝろをおけるなりけり

一 ふきかわるあらしそしるきときは山露

なき色に□は見得ねと

一 そらさゆるかつらのさとの川上にちき

りありてや月もすむらん

一 みさこいるいせの松か根まくらにてし

をかとうさみあ□□□□かな

一 下五枚はらいかねうきねそたゝん水鳥のはか

いの山もしもやおくらん

「(15才)

一 したをりのをとのみ杉もしるしにて雪

の底なる三輪の山もと

一 あちきなくなとかのふりてな□□□ん

ふしの煙もそらによりたく

一 しら玉のをたへのはしの名もつらしく

たけて落る袖のなみたに

一 いろいろかへんみきはの松のかけそへて千

代そ八千代にすめる池水

一 清趣之二字 日新公之御筆

一 享祿三年庚寅ノ春貴久公御ニ登山於当寺ニ以テ当寺

第八世頼忠法印ヲ為シテ御師範ト在ニシテ乾清ノ坊ニ習学シテ爰ニ日

新公改ニテ清趣亭ト御自書シテ清趣ノ二字ヲ以テ掛ニテ于此ニ也今ニ

日ニ御墨ノ寮ト此也其冬日新公賜ニ頼忠ニ御状曰

今度就ニ虎寿丸登山種々入魂被レ加ニ御尊意ニ候之

通承及候誠ニ過分之儀大慶不可過之候何様自

身以ニ参上ニ恐等可申述候哉万端期ニ来喜之時ニ候

之條閣レ筆候可レ得ニ御意ニ候誠事恐惶謹言

一 朧月五日 忠良判

一 一乘院御同宿中

一 太元帥明王 唐筆常暁和尚請来 義弘公ノ御寄進

此太元明王者ニ敵軍ヲ退ニ散シ大敵難ヲ威力自在ニ鎮ニ

護シテ国家ヲ明王也常暁和尚承和元年甲寅ニ入リ大唐ニ

「(16才)

「(17才)

隨三元照阿闍梨^ニ受三元明王秘法^ニ同二年乙卯婦

朝之時此太元明王ノ像^ニ幅請來也一幅者在^ニ山

城國小栗栖ノ里ノ法琳寺^ニ一幅醍醐寺^ニ依^ニ義弘

公ノ請來于当寺也

一太元明王

此明王者 網貴公關^ニ召^シヒテ太元明王威神力効驗ノ

新^{ナルコトヲ}御感心ノ余^リ新^ニ合^レ模^写之^ヲ元祿九年丙子秋御寄

進也

一 (17ウ)

五十三

一銅ノ宝劍

右宝劍者高山高崇寺本尊不動明王ノ^一(才) + ^(之)劍也去^シ

寛永十三年丙子三月九日彼院主僧儀律師ノ弟

子ノ新發意ノ僧仏前^ニ備^ヘ供物^ヲ置時^ニ鼠飽^ニ食^之ノ^ヲ於此^ニ小

僧戲^レ語^シテ曰^ク不動尊持^ニ利劍^ニ何^ノ用^乎云^フ到^リ厨屋^ニ更^ニ炊^ニ

供物^ヲ問^ニ鼠此利劍^ニツラヌカレ生^テ有焉爰^ニ師僧

感^ニ心^シテ其靈驗新^{ナルコト}此^ヲ奉^ニ納^本山^一乘院^ノ者也

一紀ノ新太夫作之太刀

右太刀古鞘ノ内書付^ニ曰寛正二年辛巳春忠国公

為琉球御渡海ノ御願^ニ寄^進於^ニ当院^ニ也^也

一 (18才)

一行平ノ作劍 一振

一紀新太夫作ノ劍 一振

一波平守安作劍 一振

一無銘劍 一振

一宣行作小刀 一本

一仁和寺智恵門院宥海以座論梅聖教右書籍四

十匣附屬当山第四世頼俊

一当山第八世頼忠法印時 日新公^{ヨリ}庭中ノ積鐵^{ツツ}御

寄御手^ニテ植玉フト也

一元和八年^ニ当寺燒失其節鳥羽院勅書其外宝物

等悉^ク燒失也

一当山第八世頼忠法印之時文祿四年三蘇院佐

兵衛尉近衛信輔公閔白職於勤^ニ吾^{ヨリ}有長老人此

故官職懇^為レ与^シ其人態退去此地下向^シ玉フ然

レトモ其後上洛^シ玉フトハ則^司ニ^リ閔白職^ニ云

一同頼忠上人時 貴久初^テ多宝塔^ヲ御建立也其

後 家久公兩度之御再興也

右終 一乘院由緒

当寺事鳥羽院後奈良院勅願所^ニ奉^ニ祈^皇

家之御繁榮之由にて繪旨を被成下就夫毎年

正月一字金輪護摩供執行仕前代には御卷数

為差上之由然共何之比より断絶仕候哉当分は

上様へ計今以年々差上申候右代に付剩へ西

国高野之由候て西海金剛峯寺は勅願を給候尤

後奈良院御尊牌御立被遊並御興願御座候^也

一 (19才)

一 (18ウ)

毎年御法事相勤来り候毎年九月開闢宮御祭
ニ付勅使御代參相勤来り申候 伯圀様 龍
伯様御二代御登山にて御習学被遊其節之住
持御指南被申上候御硯等于今経蔵へ御座候
尤右 御両牌御立被遊毎年御忌日之御法事
勤来り候

一乘院

義秀

一 (19ウ)

一乘院下乘之碑写

薩州川辺郡坊津鳥越山龍巖寺 敏達帝之時
日羅開基延文年間成円再建 鳥羽上皇又賜
名如意珠山一乘院尋 後奈良帝賜勅額贊助
法親王賜 大上皇殿額古跡靈場寔不可縷數
惜哉絶下乘近世号二千丸案西域記此地正可
設下乘今茲蒙仁和寺聰許欲建石碑祈予馳筆
予從学書法日淺不精其術不朽其技嗚呼此諒
之愆頃將泛帆鶴石工亦期日而待不能遂巡書
而以贈願母願弱翰因録日時於後背云

宝曆九年歲舍己卯五月十五日

皇都東寺東塔院權少僧都敬宝 (花押)

一乘院鐘銘写

大日本西海路薩陽川辺郡坊津西海 金剛峯

一乘院 梵鐘也夫当山者仁和寺之松派而

海西沢流棟梁也去元和年中罹不意火災山中

一時成灰燼矣火来雖飯設置小鐘報早晚声小

聽早予謂同郡森氏宗安翁曰欲銷古鐘添新銅

以造供鐘而力微不能弁財直翁能弁不翁曰弁

焉即織舟載古鐘到撰州大坂津課治公而多年

大願 曰即就焉大媿於前者也遂使聳聞於祇

洎寺之夕效楹於須弥頂之昔竊以鐘之為物也

其体不大其德汪洋行住威儀坐臥節度無不賴

之至如晨年告齊粥晚夕催誦禪聽之者憩苦鐘

之者生天三宝證明諸天擁護最伽藍要路

銘曰

一乘故刹 山高水長 宝鐘再掛 律中宮闕

迦葉自鳴 提婆重繫 驚覺睡眠 救濟沈溺

月前霜夜 送往迎來 邪林凋落 魔界碎摧

福田良種 梵宇勝緣 永期芥石 億々万年

昔明曆二載丙申季春穀旦

願主 住持 沙門覺山謹撰

施主 森宗安居士

治工 大坂住 堀四郎兵衛門家次

刻工 加世田住 野村檀右衛門勝綱

薩隅日三州大守源光久朝臣 同綱貴公 忠

一 (20ウ)

一 (21才)

一 (21ウ)

竹公 御武運長久子孫 〓〔虎〕+〔爰〕 昌国家安寧衆民豊

樂二世大願如意円満曇者所桂之鑄也星移物

換而其器稍毀其響亦繇施謂令宗安翁家嗣

寺山甚兵衛其鑄改某応諾即古鑄載缸届撰之

大坂命鑄工而大願乃成矣其因縁者詳左于先

師覚山和尚所撰所以而今不重述焉貞享五季

戊辰秋七月下澣吉旦

願主 第廿葉住 法印覚眼誌

施主 鹿兒島住 寺山甚兵衛久長 〓 (22才)

首尾催促当所主簿 官田甚左衛門信元

鑄工 大坂住 河内屋五郎左衛門

往来堂事泊之住 鮫島仁兵衛宗辰

彫工 当寺門前 月野右近重達 〓 (22ウ)

【付記】

貴重な蔵書の閲覧、掲載を御許可いただいた東京大学史料編纂所に心より御礼申し上げます。